

名古屋中村遊廓の建築計画的研究

その2 一般的遊廓建築の平面計画

【序】廃業に追い込まれた中村遊廓は、その後も特殊浴場や旅館業にその活路を見いだし、営業を続けてきたが、近年建物の老朽化と押し寄せる開発の波によって建物の取り壊しが進み、当時の面影のある建物は加速度的に姿を消しつつある。本研究では、残り少なくなった遊廓建築の中でも比較的当時の状態がよく保存されていると思われる「新千寿」及び「新山水」、「銀波」について実測調査を行うとともに、ヒアリング調査によって得られた他の妓楼についての資料をもとに、中村遊廓における一般的な建築がどのようなものであったかを明らかにする。

【中村遊廓の一般的遊廓建築】中村遊廓は一筆125坪の均等な地割がなされ、一楼当たりの娼妓数も15人以内と定められていたため、多くの妓楼の平面計画はお互い似通った傾向をみせている。当時、中村遊廓の妓楼のうちおよそ89%を占めていたそれらの建物を、本研究では一般的遊廓建築と呼ぶこととする。

【新千寿、新山水、銀波の実測】取り壊しの進む遊廓建築を資料として保存するため、昨年8月に取り壊されることになっていた新千寿と新山水を和風妓楼の代表として、また、本年所有権の移動により調査可能となった銀波を洋風妓楼の代表として、それぞれ実測調査を行った結果、次のような特徴が明らかになった。

新千寿：通常の妓楼は表玄関は一箇所だが、新千寿は南と西の両側が通りに面しているため二箇所にあり、二つの玄関は内部で一つになっている。中庭は通りに面しており、数寄屋風の門が造られていて、庭には茶室が設けられている。左下隅に欠けがあるが、これは交差点の隅切りに合わせて平面計画されたためである。

新山水：二階の庭周りの廊下は窓がなく開放されており、夏の暑さ対策のためか、通風が取れるようになっている。動線は完全に分離されており、右側の玄関から一階に通ずる廊下はない。二階奥に洋間がある点と、水周りが左奥側に集中している点も特徴的である。

銀波：ファサードは洋風だが、房室はすべて和室である

正会員○ 近藤 正一 ※²
同 若山 滋 ※¹
同 渡辺 孝一 ※²
同 松村 秀弦 ※²

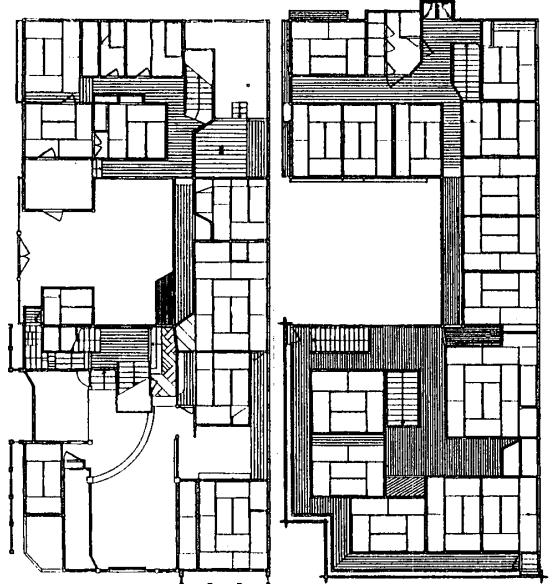


図1 新千寿 1 12尺

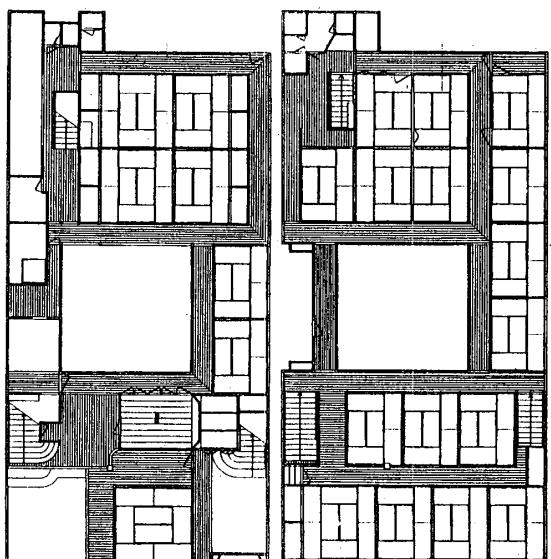


図2 新山水 1 12尺

A study on architectural planning and design

for Nagoya Nakamura-yukaku

Part2 Plane figure of generally buildings in the licensed quarters

5251

Shouiti Kondou et al.

ことから、ファサードが後付けのものであることがいえる。房室は完全な口の字型配置で、一階奥にも意匠の凝らされた部屋があり、階段が奥に二つ配置されていることから、一階の一部も房室として使用していたと考えられる。

【二階平面のパターン化】全ての妓楼が二階のほとんどの部屋を房室として使用しているため、二階平面を分類することによって、その妓楼の平面計画を特色づけることができる。そこで、実測調査と、同時に実施したヒアリング調査によって明らかになった12の建物の二階平面について『房室と廊下』、『房室』、『廊下』の三つのゾーンに分類し、パターン化を試みた。

図5のように、まず第一段階として12の妓楼についてゾーン分類を行うと9パターンになり、次に第二段階として平面計画上特に重要と思われる中庭の周りだけに注目してみると6パターンに整理できる。さらに第三段階ではそこから『房室』と『廊下』を取り除くことによって、コの字型、口の字型、二の字型の3パターンに集約できる。それぞれコの字型は9軒、口の字型は2軒、二の字型は1軒が該当していることから、一般的遊廓建築は中庭の周りに房室と廊下をコの字型に配置したものが最も多いと考えられる。

【一般的遊廓建築の平面計画】各妓楼は、間口約46.5尺、奥行き約93尺で、必ず中庭が設けられ、それを取り巻いて廊下が巡らされている。名古屋の地方性から路地ではなく、中庭採光で、しかも廊下越しになっているが、これは昼間でも夜の雰囲気を醸し出すための演出と思われる。

各妓楼の裏側は裏動線として便道が設けられており、奥の方に台所や風呂、便所等の水周りが集中している。物干しは当時の資料から屋根の上で行ったとみられる。

階段の幅は四尺から五尺で、防災計画上、一楼につき三箇所設けることが義務づけられていたが、その配置は中庭の手前に二箇所、奥に一箇所のものが多い。これは一階奥が家人の部屋になっており、動線上、客は一階の奥には入れないためであり、一般的にそのような妓楼では一階に房室はない。一方、一階にも房室がある妓楼は階段が奥に二箇所設けられている。一般的に房室は一部屋六畳（畳の大きさは6尺×3尺）で、部屋には床の間が付いているが押入は付いていない。次の間をもち、意匠の凝らされた格の高い部屋は、平面計画上奥の部分にある場合が多い。

【結】当時、平面計画についての取り決めは特になかったといわれるが、中村遊廓は田畠を埋め立てて造られた近代的な人工都市で地割が規則的であった点、部屋数、階段数などの取り決めがなされていた点、便道の存在など、機能的な諸要因によって、自ずから中庭を中心とした二階建ての平面計画に標準化されていたといえる。

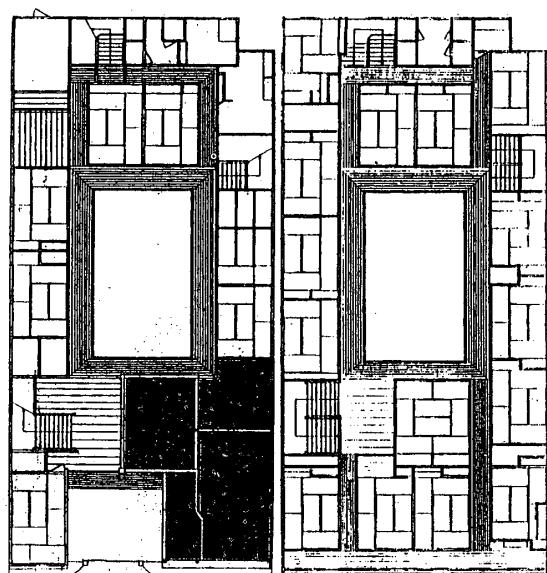


図3 銀波
1 12尺

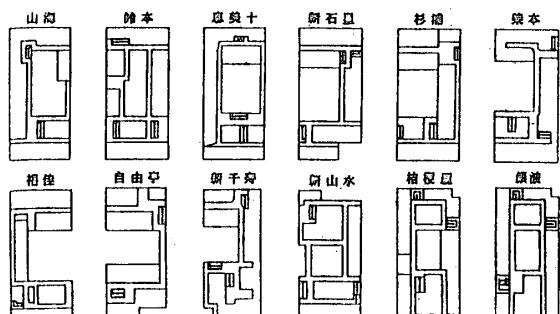


図4 二階簡略平面図

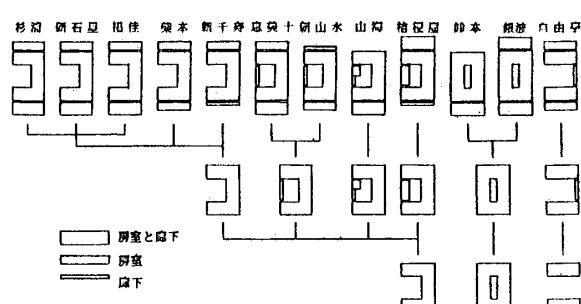


図5 二階平面パターン図

※¹名古屋工業大学教授・工博※²名古屋工業大学大学院